

ただし、 $a=1, \dots, 5, N_j$ ($j=1, \dots, e$) を枝 j の断面数とすれば、

$$\begin{aligned} P_a &= \begin{bmatrix} U_a^1 \\ \vdots \\ U_a^e \end{bmatrix}, \quad R_a = \begin{bmatrix} V_a^1 \\ \vdots \\ V_a^e \end{bmatrix}, \quad \Delta \bar{h} = \begin{bmatrix} h_{N_1}^1 & \dots & h_{N_e}^e \end{bmatrix}^T, \quad \Delta \bar{h} = \begin{bmatrix} h_{N_1}^1 & \dots & h_{N_e}^e \end{bmatrix}^T \\ \Delta \bar{q} &= \begin{bmatrix} q_{N_1}^1 & \dots & q_{N_e}^e \end{bmatrix}^T, \quad \Delta \bar{q} = \begin{bmatrix} q_{N_1}^1 & \dots & q_{N_e}^e \end{bmatrix}^T \\ \Delta \bar{h} &= \begin{bmatrix} h_{N_1}^1 & \dots & h_{N_{1-1}}^1 & \dots & h_{N_e}^e & \dots & h_{N_{e-1}}^e \end{bmatrix}^T, \quad \Delta \bar{q} = \begin{bmatrix} q_{N_1}^1 & \dots & q_{N_{1-1}}^1 & \dots & q_{N_e}^e & \dots & q_{N_{e-1}}^e \end{bmatrix}^T \\ \mathcal{G}_1 &= \begin{bmatrix} G_1^1 & F_1^1 & \dots & G_1^e & F_1^e \end{bmatrix}^T, \quad \mathcal{G}_{N-1} = \begin{bmatrix} G_{N_{1-1}}^1 & F_{N_{1-1}}^1 & \dots & G_{N_{e-1}}^e & F_{N_{e-1}}^e \end{bmatrix}^T \\ \mathcal{G} &= \begin{bmatrix} G_2^1 & F_2^1 & \dots & G_{N_{1-2}}^1 & F_{N_{1-2}}^1 & \dots & G_2^e & F_2^e & \dots & G_{N_{e-1}}^e & F_{N_{e-1}}^e \end{bmatrix}^T \end{aligned}$$

である。ここで、 $\Delta \bar{h}^+$ は各枝上流側の水位の変化量、 $\Delta \bar{h}^-$ は各枝下流側の水位の変化量を表す。さらに、水位の連続条件が考慮できるように、節点で定義される水位の変化量 $\Delta \bar{H} = [\Delta H_1, \dots, \Delta H_n]^T$ を導入し、入・出連結行列を用いると、

$$\Delta \bar{h}^+ = D^+ \Delta \bar{H}, \quad \Delta \bar{h}^- = D^- \Delta \bar{H} \quad (4)$$

のように表示できる²⁾。ただし、 D^+ : 出連結行列、 D^- : 入連結行列、 T : 転置を表す。

さらに、境界条件の導入のために、各変数をソース(+), 中間ノード(0), シンク(-)に分割して次のように表示する。

$$D^+ = \begin{bmatrix} D_+^+ \\ D_0^+ \\ D_-^+ \end{bmatrix}, \quad D^- = \begin{bmatrix} D_+^- \\ D_0^- \\ D_-^- \end{bmatrix}, \quad \Delta \bar{H} = \begin{bmatrix} \Delta H_+ \\ \Delta H_0 \\ \Delta H_- \end{bmatrix} \quad (5)$$

これらを(3)式に代入して、 $D_-^+ = 0$, $D_+^- = 0$ を考慮し展開すると、

$$\begin{aligned} P_1 D_+^+ \Delta \bar{H}_+ + P_1 D_0^+ \Delta \bar{H}_0 + R_1 \Delta \bar{q} + P_3 \Delta \bar{h} + R_3 \Delta \bar{q} &= -\mathcal{G}_1 \\ P_2 D_0^- \Delta \bar{H}_0 + P_3 D_-^- \Delta \bar{H}_- + R_2 \Delta \bar{q} + P_4 \Delta \bar{h} + R_4 \Delta \bar{q} &= -\mathcal{G}_{N-1} \\ P_5 \Delta \bar{h} + R_5 \Delta \bar{q} &= -\mathcal{G} \end{aligned} \quad (6)$$

となる。また、収束計算の過程の $k+1$ ステップの境界条件は以下のように表せる³⁾。

$$\mathcal{F}_1 = D_+^+ \bar{q} - \mathcal{F}(t) = 0, \quad \mathcal{F}_2 = D_0^+ \bar{q} - D_0^- \bar{q} = 0, \quad \mathcal{F}_3 = \bar{H}_- - f(t) = 0 \quad (7)$$

ただし、第1式はソースの条件式であり、 $\mathcal{F}(t)$ は流量ハイドログラフ、第2式は中間ノードにおける流量の連続条件式、第3式はシンクにおける条件式であり、 $f(t)$ は水位ハイドログラフ、 t は時刻を表す。ここで、(7)式をTaylor展開し、単位行列を E とすれば、

$$D_+^+ \Delta \bar{q} = -\mathcal{F}_1, \quad D_0^+ \Delta \bar{q} - D_0^- \Delta \bar{q} = -\mathcal{F}_2, \quad E \Delta \bar{H}_- = -\mathcal{F}_3 \quad (8)$$

のようになる。ただし、(8)式において、右辺のベクトルは未知水理量の逐次近似値を代入して得られたものである。したがって、(6), (8)式を連立すれば、 $2 \sum N_j - 2e + n$ 個の連立方程式 ($j=1, \dots, e$) が得られ、これをくり返し収束計算することにより、次時刻ステップの諸量を求めることができる。

4. あとがき ; 以上、4点Implicit法による河川網洪水流のグラフ理論的な定式化方法を提案したが、今後は実河川網に適用し、本手法の有効性を検討する予定である。

参考文献 ; 1) 土木学会編 : 水理公式集。 2) 常松・金本 : 広島大学工学部研究報告, 38-1。 3) 前出 2)。